角川文庫
— 28 —

人間失格・櫻桃

太宰治

角川書店

昭和二十五年十月三十日　初版發行
昭和四十年三月十日　四十四版發行

定價八拾圓

著作者　太宰治

發行者　角川源義

印刷者　田中昭三
東京都新宿區改代町二四

角川文庫

人間失格・櫻桃

發行所　東京都千代田區富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八　株式會社角川書店
電話九段(261)〇二二(代表)

落丁・亂丁本はお取替へ致します

Printed in Japan　理想社印刷・本間製本

人間失格・櫻桃

他二篇

太宰　治

角川文庫

28

目次

人間失格
ヴィヨンの妻
竹青
櫻桃
水中の友
年譜

釋迢空

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

櫻桃

太宰治

われ、山にむかひて、目を擧ぐ。

詩篇、第百二十一。

人間失格

はしがき

私は、その男の寫眞を三葉、見たことがある。

一葉は、その男の、幼年時代、とでも言ふべきであらうか、十歳前後かと推定される頃の寫眞であつて、その子供が大勢の女のひとに取りかこまれ、（それは、その子供の姉たち、妹たち、それから、從姉妹たちかと想像される）庭園の池のほとりに、荒い縞の袴をはいて立ち、首を三十度ほど左に傾け、醜く笑つてゐる寫眞である。醜く？　けれども、鈍い人たち（つまり、美醜などに關心を持たぬ人たち）は、面白くも何とも無いやうな顏をして、

「可愛い坊ちやんですね」

といい加減なお世辭を言つても、まんざら空お世辭に聞えないくらゐの、謂はば通俗の「可愛らしさ」みたいな影もその子供の笑顏に無いわけではないのだが、しかし、いささかでも、美醜に就いての訓練を經て來たひとなら、ひとめ見てすぐ、

「なんて、いやな子供だ」

と頻る不快さうに呟き、毛蟲でも拂ひのける時のやうな手つきで、その寫眞をはふり投げるかも知れない。

まつたく、その子供の笑顔は、よく見れば見るほど、何とも知れず、イヤな薄氣味惡いものが感ぜられて來る。どだい、それは、笑顔でない。この子は、少しも笑つてはゐないのだ。その證據には、この子は、兩方のこぶしを固く握つて立つてゐる。人間は、こぶしを固く握りながら笑へるものでは無いのである。猿だ。猿の笑顔だ。ただ、顔に醜い皺を寄せてゐるだけなのである。「皺くちや坊ちやん」とでも言ひたくなるくらゐの、まことに奇妙な、さうしてどこかけがらはしく、へんにひとをムカムカさせる表情の寫眞であつた。私はこれまで、こんな不思議な表情の子供を見た事が、いちども無かつた。

第二葉の寫眞の顔は、これはまた、びつくりするくらゐひどく變貌してゐた。學生の姿である。高等學校時代の寫眞か、大學時代の寫眞か、はつきりしないけれども、とにかく、おそろしく美貌の學生である。しかし、これもまた、不思議にも、生きてゐる人間の感じはしなかつた。學生服を着て、胸のポケットから白いハンケチを覗かせ、籐椅子に腰かけて足を組み、さうして、やはり、笑つてゐる。こんどの笑顔は、皺くちやの猿の笑ひでなく、かなり巧みな微笑になつてゐるが、しかし、人間の笑ひと、どこやら違ふ。血の重さ、とでも言はうか、生命の澁さ、とでも言はうか、そのやうな充實感は少しも無く、それこそ、鳥のやうではなく、羽毛のやうに輕く、ただ白紙一枚、さうして、笑つてゐる。つまり、一から十まで造り物の感じなのである。キザと言つても足りない。輕薄と言つても足りない。ニヤケと言つても足りない。おしやれと言つても、

もちろん足りない。しかも、よく見てゐると、やはり美貌の學生にも、どこか怪談じみた氣味惡いものが感ぜられて來るのである。私はこれまで、こんな不思議な美貌の青年を見た事が、いちども無かつた。

もう一葉の寫眞は、最も奇怪なものである。まるでもう、とし頃がわからない。頭はいくぶん白髮のやうである。それが、ひどく汚い部屋（部屋の壁が三箇所ほど崩れ落ちてゐるのが、その寫眞にハッキリ寫つてゐる）の片隅で、小さい兩手をかざし、こんどは笑つてゐない。どんな表情も無い。謂はば、坐つて火鉢に兩手をかざしながら、自然に死んでゐるやうな、まことにいまはしい、不吉なにほひのする寫眞であつた。奇怪なのは、それだけでない。その寫眞には、わりに顏が大きく寫つてゐたので、私は、つくづくその顏の構造を調べる事が出來たのであるが、額は平凡、額の皺も平凡、眉も平凡、眼も平凡、鼻も口も顎も、ああ、この顏には表情が無いばかりか、印象さへ無い。特徵が無いのだ。たとへば、私がこの寫眞を見て、眼をつぶる。既に私はこの顏を忘れてゐる。部屋の壁や、小さい火鉢は思ひ出す事が出來るけれども、その部屋の主人公の顏の印象は、すつと霧消して、どうしても、何としても思ひ出せない。畫にならない顏である。漫畫にも何もならない顏である。眼をひらく。あ、こんな顏だつたのか、思ひ出した、といふやうなよろこびさへ無い。極端な言ひ方をすれば、眼をひらいてその寫眞を再び見ても、思ひ出せない。さうして、ただもう不愉快、イライラして、つい眼をそむけたくなる。

所謂「死相」といふものにだつて、もつと何か表情なり印象なりがあるものだらうに、人間のからだに馱馬の首でもくつつけたら、こんな感じのものになるであらうか、とにかく、どことい

ふ事なく、見る者をして、ぞつとさせ、いやな氣持にさせるのだ。私はこれまで、こんな不思議な男の顔を見た事が、やはり、いちども無かつた。

第一の手記

恥の多い生涯を送つて來ました。

自分には、人間の生活といふものが、見當つかないのです。自分は東北の田舍に生れましたので、汽車をはじめて見たのは、よほど大きくなつてからでした。自分は停車場のブリッヂを、上つて、降りて、さうしてそれが線路をまたぎ越えるために造られたものだといふ事には全然氣づかず、ただそれは停車場の構内を外國の遊戯場みたいに、複雜に樂しく、ハイカラにするためにのみ、設備せられてあるものだとばかり思つてゐました。しかも、かなり永い間さう思つてゐたのです。ブリッヂの上つたり降りたりは、自分にはむしろ、ずゐぶん垢抜けのした遊戯で、それは鐵道のサーヴィスの中でも、最も氣のきいたサーヴィスの一つだと思つてゐたのですが、のちにそれはただ旅客が線路をまたぎ越えるための頗る實利的な階段に過ぎないのを發見して、にはかに興が覺めました。

また、自分は子供の頃、繪本で地下鐵道といふものを見て、これもやはり、實利的な必要から案出せられたものではなく、地上の車に乘るよりは、地下の車に乘つたはうが風がはりで面白い遊びだから、とばかり思つてゐました。

自分は子供の頃から病弱で、よく寢込みましたが、寢ながら、敷布、枕のカヴァ、掛蒲團のカヴァを、つくづく、つまらない裝飾だと思ひ、それが案外に實用品だつた事を、二十歳ちかくになつてわかつて、人間のつましさに黯然とし、悲しい思ひをしました。

また、自分は、空腹といふ事を知りませんでした。いや、それは、自分が衣食住に困らない家に育つたといふ意味ではなく、そんな馬鹿な意味ではなく、自分には「空腹」といふ感覺はどんなものだか、さつぱりわからなかつたのです。へんな言ひかたですが、おなかが空いてゐても、自分でそれに氣がつかないのです。小學校、中學校、自分が學校から歸つて來ると、周圍の人たちが、それ、おなかが空いたらう、自分たちにも覺えがある、學校から歸つて來た時の空腹は全くひどいからな、甘納豆はどう？　カステラも、パンもあるよ、などと言つて騷ぎますので、自分は持ち前のおべつか精神を發揮して、おなかが空いた、と呟いて、甘納豆を十粒ばかり口にはふり込むのですが、空腹感とは、どんなものだか、ちつともわかつてゐやしなかつたのです。

自分だつて、それは勿論、大いにものを食べますが、しかし、空腹感から、ものを食べた記憶は、ほとんどありません。めづらしいと思はれたものを食べます。豪華と思はれたものを食べます。また、よそへ行つて出されたものも、無理をしてまで、たいてい食べます。さうして、子供の頃の自分にとつて、最も苦痛な時刻は、實に、自分の家の食事の時間でした。

自分の田舍の家では、十人くらゐの家族全部、めいめいのお膳を二列に向ひ合せに並べて、末つ子の自分は、もちろん一ばん下の座でしたが、その食事の部屋は薄暗く、晝ごはんの時など、十幾人の家族が、ただ默々としてめしを食つてゐる有樣には、自分はいつも肌寒い思ひをしまし

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

た。それに田舎の昔氣質の家でしたので、おかずも、たいていきまつてゐて、めづらしいもの、豪華なもの、そんなものは望むべくもなかつたので、いよいよ自分は食事の時刻を恐怖しました。自分はその薄暗い部屋の末席に、寒さにがたがた震へる思ひで口にごはんを少量づつ運び、押し込み、人間は、どうして一日に三度々々ごはんを食べるのだらう、實にみな嚴肅な顏をして食べてゐる、これも一種の儀式のやうなもので、家族が日に三度々々、時刻をきめて薄暗い一部屋に集り、お膳を順序正しく並べ、食べたくなくても無言でごはんを嚙みながら、うつむき、家中にうごめいてゐる靈たちに祈るためのものかも知れない、とさへ考へた事があるくらゐでした。

めしを食べなければ死ぬ、といふ言葉は、自分の耳には、ただイヤなおどかしとしか聞えませんでした。その迷信は、（いまでも自分には、何だか迷信のやうに思はれてならないのですが）しかし、いつも自分に不安と恐怖を與へました。人間は、めしを食べなければ死ぬから、そのために働いて、めしを食べなければならぬ、といふ言葉ほど自分にとつて難解で晦澁で、さうして脅迫めいた響きを感じさせる言葉は、無かつたのです。

つまり、自分には人間の營みといふものが未だに何もわかつてゐない、といふ事になりさうです。自分の幸福の觀念と、世のすべての人たちの幸福の觀念とが、まるで食ひちがつてゐるやうな不安、自分はその不安のために夜々、轉輾し、呻吟し、發狂しかけた事さへあります。自分は、いつたい幸福なのでせうか。自分は小さい時から、實にしばしば、仕合せ者だと人に言はれて來ましたが、自分ではいつも地獄の思ひで、かへつて、自分を仕合せ者だと言つたひとたちのはうが、比較にもならぬくらゐずつとずつと安樂なやうに自分には見えるのです。

自分には、禍ひのかたまりが十個あつて、その中の一個でも、隣人が背負つたら、その一個だけでも充分に隣人の生命取りになるのではあるまいかと、思つた事さへありました。

つまり、わからないのです。隣人の苦しみの性質、程度が、まるで見當つかないのです。プラクティカルな苦しみ、ただ、めしを食へたらそれで解決できる苦しみ、しかし、それこそ最も強い苦痛で、自分の例の十個の禍ひなど、吹つ飛んでしまふ程の、凄慘な阿鼻地獄なのかも知れない、それは、わからない、しかし、それにしては、よく自殺もせず、發狂もせず、政黨を論じ、絶望せず、屈せず生活のたたかひを續けて行ける、苦しくないんぢやないか？　エゴイストになりきつて、しかもそれを當然の事と確信し、いちども自分を疑つた事が無いんぢやないか？　それなら、樂だ、しかし、人間といふものは、皆そんなもので、またそれで滿點なのではないかしら、わからない、……夜はぐつすり眠り、朝は爽快なのかしら、どんな夢を見てゐるのだらう、道を歩きながら何を考へてゐるのだらう、金？　まさか、それだけでも無いだらう、人間は、めしを食ふために生きてゐるのだ、といふ説は聞いた事があるやうな氣がするけども、金のために生きてゐる、といふ言葉は、耳にしたことが無い、いや、しかし、ことに依ると、……いや、それもわからない、……考へれば考へるほど、自分には、わからなくなり、自分ひとり全く變つてゐるやうな、不安と恐怖に襲はれるばかりなのです。自分は隣人と、ほとんど會話が出來ません。何を、どう言つたらいいのか、わからないのです。

そこで考へ出したのは、道化でした。

それは、自分の、人間に對する最後の求愛でした。自分は、人間を極度に恐れてゐながら、そ

れでゐて、人間を、どうしても思ひ切れなかつたらしいのです。さうして自分は、この道化の一線でわづかに人間につながる事が出來たのでした。おもてでは、絶えず笑顔をつくりながらも、内心は必死の、それこそ千番に一番の兼ね合ひとでもいふべき危機一髪の、油汗流してのサーヴィスでした。

自分は子供の頃から、自分の家族の者たちに對してさへ、彼等がどんなに苦しく、またどんな事を考へて生きてゐるのか、まるでちつとも見當つかず、ただおそろしく、その氣まづさに堪へる事が出來ず、既に道化の上手になつてゐました。つまり、自分は、いつのまにやら、一言も本當の事を言はない子になつてゐたのです。

その頃の、家族たちと一緒にうつした寫眞など見ると、他の者たちは皆まじめな顔をしてゐるのに、自分ひとり、必ず奇妙に顔をゆがめて笑つてゐるのです。これもまた、自分の幼く悲しい道化の一種でした。

また自分は、肉親たちに何か言はれて、口應へした事はいちども有りませんでした。そのわづかなおこごとは、自分には霹靂の如く感ぜられ、狂ふみたいになり、口應へどころか、そのおこごとこそ、謂はば萬世一系の人間の「眞理」とかいふものに違ひない、自分にはその眞理を行ふ力が無いのだから、もはや人間と一緒に住めないのではないかしら、と思ひ込んでしまふのでした。だから自分には、言ひ爭ひも自己辯解も出來ないのでした。人から惡く言はれると、いかにも、もつとも自分がひどい思ひ違ひをしてゐるやうな氣がして來て、いつもその攻擊を默して受け、内心、狂ふほどの恐怖を感じました。

それは誰でも、人から非難せられたり、怒られたりしていい氣持がするものでは無いかも知れませんが、自分は怒つてゐる人間の顔に、獅子よりも鰐よりも龍よりも、もつとおそろしい動物の本性を見るのです。ふだんは、その本性をかくしてゐるやうですけれども、何かの機會に、たとへば、牛が草原でおつとりした形で寢てゐて、突如、尻尾でピシッと腹の虻を打ち殺すみたいに、不意に人間のおそろしい正體を、怒りに依つて暴露する樣子を見て、自分はいつも髮の毛の逆立つほどの戰慄を覺え、この本性もまた人間の生きて行く資格の一つなのかも知れないと思へば、ほとんど自分に絶望を感じるのでした。

人間に對して、いつも恐怖に震へをののき、また、人間としての自分の言動に、みぢんも自信を持てず、さうして自分ひとりの懊惱は胸の中の小箱に祕め、その憂鬱、ナアヴァスネスを、ひたかくしに隱して、ひたすら無邪氣の樂天性を裝ひ、自分はお道化たお變人として、次第に完成されて行きました。

何でもいいから、笑はせてをればいいのだ、さうすると、人間たちは、自分が彼等の所謂「生活」の外にゐても、あまりそれを氣にしないのではないかしら、とにかく、彼等人間たちの目障りになつてはいけない、自分は無だ、風だ、空だ、といふやうな思ひばかりが募り、自分はお道化に依つて家族を笑はせ、また、家族よりも、もつと不可解でおそろしい下男や下女にまで、必死のお道化のサーヴィスをしたのです。

自分は夏に、浴衣の下に赤い毛絲のセエターを着て廊下を歩き、家中の者を笑はせました。めつたに笑はない長兄も、それを見て噴き出し、

「それあ、葉ちやん、似合はない」

と、可愛くてたまらないやうな口調で言ひました。なに、自分だつて眞夏に毛絲のセエターを着て歩くほど、いくら何でも、そんな、暑さ寒さを知らぬお變人ではありません。姉の脚絆を兩腕にはめて、浴衣の袖口から覗かせ、以てセエターを着てゐるやうに見せかけてゐたのです。

自分の父は、東京に用事の多いひとでしたので、上野の櫻木町に別莊を持つてゐて、月の大半は東京のその別莊で暮してゐました。さうして歸る時には家族の者たち、また親戚の者たちにまで、實におびただしくお土産を買つて來るのが、まあ、父の趣味みたいなものでした。いつかの父の上京の前夜、父は子供たちを客間に集め、こんど歸る時には、どんなお土産がいいか、一人一人に笑ひながら尋ね、それに對する子供たちの答をいちいち手帳に書きとめるのでした。父が、こんなに子供たちと親しくするのは、めづらしい事でした。

「葉藏は？」

と聞かれて、自分は、口ごもつてしまひました。

何が欲しいと聞かれると、とたんに、何も欲しくなくなるのでした。どうでもいい、どうせ自分を樂しくさせてくれるものなんか無いんだといふ思ひが、ちらと動くのです、と、同時に、人から與へられるものを、どんなに自分の好みに合はなくても、それを拒む事も出來ませんでした。イヤな事を、イヤと言へず、また、好きな事も、おづおづと盜むやうに、極めてにがく味ひ、さうして言ひ知れぬ恐怖感にもだえるのでした。つまり、自分には、二者選一の力さへ無かつたのです。これが、後年に到り、いよいよ自分の所謂「恥の多い生涯」の、重大な原因ともなる性癖

の一つだつたやうに思はれます。自分が默つて、もぢもぢしてゐるので、父はちよつと不機嫌になり、

「やはり、本か。淺草の仲店にお正月の獅子舞ひのお獅子、子供がかぶつて遊ぶのには手頃な大きさのを賣つてゐたけど、欲しくないか」

欲しくないか、と言はれると、もうダメなんです。お道化た返事も何も出來やしないんです。お道化役者は完全に落第でした。

「本が、いいでせう」

長兄は、まじめな顔をして言ひました。

「さうか」

父は、興覺め顔に手帳に書きとめもせず、パチと手帳を閉ぢました。

何といふ失敗、自分は父を怒らせた、父の復讐は、きつと、おそるべきものに違ひない、いまのうちに何とかして取りかへしのつかぬものか、とその夜、蒲團の中でがたがた震へながら考へ、そつと起きて客間に行き、父が先刻、手帳をしまひ込んだ筈の机の引き出しをあけて、手帳を取り上げ、パラパラめくつて、お土産の注文記入の個所を見つけ、手帳の鉛筆をなめて、シシマヒ、と書いて寢ました。自分はその獅子舞ひのお獅子を、ちつとも欲しくは無かつたのです。かへつて、本のはうがいいくらゐでした。けれども、自分は、父がそのお獅子を自分に買つて與へたいのだといふ事に氣がつき、父のその意向に迎合して、父の機嫌を直したいばかりに、深夜、客間に忍び込むといふ冒險を、敢へてをかしたのでした。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com